

セミナー

学びがつなぐコミュニティ - 地域のために社会教育ができること -

総合司会 西野美佐子（仙台市社会教育委員委員長・東北福祉大学教授）
コーディネーター 相馬宏男（仙台市社会教育委員・NHK仙台放送局チーフアナウンサー）
パネリスト 熱海歌子（パパネット南小泉推進委員会）
後藤義光（特定非営利活動法人おとなりどーし代表）
八嶋敏郎（仙台市木町通市民センター館長）
紅邑晶子（仙台市社会教育委員・特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPO
センター常務理事・事務局長）

（敬称略）

日時：平成19年7月14日（土） 13時30分～15時30分

会場：せんだいメディアテーク 7階スタジオシアター

西野 ただいまより、仙台市社会教育委員の会議の主催であるセミナー「学びがつなぐコミュニティ - 地域のために社会教育ができること」を開催いたします。

今日は梅雨時、そして台風の接近等でうとうしい日になっておりますが、そのような中おいでくださいませ、誠にありがとうございます。

本日のセミナーの総合司会を務めさせていただきます西野と申します。どうぞよろしく願いいたします。

初めに、このセミナーの趣旨並びにこれまで社会教育委員の会議で取り組んできたことについて若干説明させていただきます。

社会経済の急激な変動は、地域に暮らす人々の暮らしにも多大な影響を与えました。例えば、伝統的な子育ての衰退であるとか、あるいは暮らしの中で人と人とのつながりが大変希薄化したこと。それから、振興団地であったところに高齢化が進んでいる問題。それから、いろいろな災害時の安全・安心のまちづくり等、今日地域づくりが大変緊急の課題になっているかと思えます。そのために、人々の暮らしの場である地域に、かつての共同体的なつながりを取り戻すだけでは不十分で、新たな人と人とのつながりを取り結ぶ、そういう試みが必要になっているように思われます。

仙台市では、コミュニティビジョンの作成に取り掛かった年でもあり、私たち社会教育委員の会議では、その地域の暮らしの場ということに焦点を当てて

身近な社会教育施設である市民センターのあり方、あるいはそこにおける活動を通して地域コミュニティの人々の新たな結びつきに、どんなふうにそういう活動が貢献しているのか、といったことを見ていこうと考えました。

これまでの社会教育委員の会議ではこのような課題認識のもとに、従来より地域において最も身近である市民センターがその地域づくりにどんな貢献をしていくのか、あるいはその貢献をしていくためには市民センターのあり方がどうあるべきかといったことを検討しようということで、地域の市民センターに実地調査に入りました。

市民センターの課題というのは、地域のおかれた状況によって大変異なっております。そこで、地域の異なる三つの市民センターを調査いたしました。三つというのは、新興住宅地にある市民センター、市中心部の市民センター、それから農業と新興住宅地が混合したような市民センター、そういった市民センターを選定いたしましてそこに赴き、どんな活動をし、どんな課題があるのかについて調査をいたしました。その報告に関しては、中間報告として昨年11月にまとめております。その調査で市民センターというものは、地域の生涯学習の拠点施設として幅広い役割を果たしていることを確認いたしました。

しかしながら、同時にいろいろな課題が見えてまいりました。例えば、一つは市民センターが地域に興味

を持って愛着を感じたり、地域について理解を深める機会を提供している大きな役割を果たしておりますが、そのために地域のニーズといったものをいかに把握するかといった課題です。これは、地域によってさまざまな課題がありますので、最も密接な地域課題を把握して、市民センターがその講座であるとか、あるいは市民活動を行うことの支援に役立てていくための地域ニーズの把握といった問題です。

次に、市民センターが、市民が地域コミュニティの一員として自主的な活動に参加できるように個人を育成したり、市民活動を行う組織づくりの支援を行っておりますが、その利用しやすさといった問題があるかと思えます。現在、市民センターを利用している人々は、大変限られている、あるいは市民センターの講座を学んだ後に自主的に自分たちがボランティア活動を組織して地域活動を行っている人がおりますが、それもごく限られた人であるというようなことがあります。利用しやすさの問題とともに市民活動を行うことのいろいろな問題があるかと思えます。

第三に、市民センターは、地域で自立した活動を既に展開しているいろいろな組織や団体に対して活動の場を提供しておりますが、その活動がどんなふう継続されていくのか、人材育成とも絡んでまいりますが、そういった継続性の問題があります。それは、資金の問題も絡んでくるかと思うのですが、人と人との関係も大変重要な課題だろうと思われまます。

最後に、いろいろな組織、あるいは市民センターとかかわりを持っている人たちは、それで何とかつながりは取り結んでいくし、自分たちのニーズといったものを主張できるわけですが、実際はその組織や機関とあまりかかわりを持たない人、逆に言うとそういう人たちの方が大変重要なニーズを持っている。そうするとそういったかかわりを持たない人たちはいかに市民センターの活動とか、あるいは機関と関係を取り結んでいくかといったような課題が残されているかと思えます。

そういったように、市民センターの活動、市民センターというのは最も身近な社会教育施設で大変重要な社会地域づくりに貢献していることは確認できましたけれども、それでもいろいろな課題があることがわかってまいりました。

後期は大変短い期間ではありますが、市民センターも含めましてもっと地域を広く捉えて、社会教育は地域づくりに何ができるか、といったことについて検討してまとめてみようということになりました。

本日は、日ごろより地域社会の中で市民センター、あるいは学校、あるいはもっと広い地域を念頭において地域コミュニティづくりのためにご活躍をされて

いる皆様にお集まりいただきまして、「学びがつなぐコミュニティ - 地域のために社会教育ができること」というテーマで、日ごろの実践、あるいはその取り組みの中で課題になっていることなどを率直にご報告していただきたいと考えております。そして、今日ご参加のフロアの皆様からは、自由闊達にこのテーマについてのより発展的なご意見をいただければと思っております。

私たちは、11月までに最終的な提言書を作成する際に、このセミナーの討議を踏まえて集約させていただきたいと考えておりますので、今日はシンポジストの皆様、それからフロアの皆様とともに一緒に地域づくりにおいて社会教育が何が果たせるのか、そういったことについてご意見をたくさんいただければいいと思っております。

簡単ではありますが、私の方からごあいさつに代えさせていただきます。

それから、これからのセミナーの進行につきまして、社会教育委員である相馬委員にお願いしておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

相馬 ただ今ご紹介いただきましたNHKの相馬宏男です。私も社会教育委員の1人ということで、大層な役回りを今からおよそ8年ぐらい前に仰せつかって、毎回のよういろいろな形で発言をしまりました。

今日は、「学びがつなぐコミュニティ - 地域のために社会教育ができること」というテーマにこの4人の皆さんと一緒に話をしていこうということで、会場の皆さんにも既にお渡ししていると思えますけれども、議論の中に反映をさせたいと思えますのでそれぞれお考えがありましたら紙に書いていただいて、ちょうど中間ぐらいのところでご紹介しがてら議論に反映させていこうというふうに思っております。

実はこの社会教育委員の会議は、各期毎にいろいろなテーマを設けて話し合いを進めてまいりました。古いところで言いますと、平成11年には「子どもとともに生きる」というテーマでした。平成13年には「仙台市における生涯学習施策の展開のために」、それから平成15年には「現代の青年の意識と成人式のあり方について」というテーマで議論を進めて提言書にまとめております。ちょうどこの時期といいましますのは、仙台市でも荒れる成人式ということが問題になった時期で、そういうテーマを取り上げて成人式のあり方を含めて、青年の意識はどうかということいろいろと考えてまいりました。そして、この前のところでは「学校、家庭、地域における新しいつながりを求めて、地域教育の創造的発展のために」というテーマでここに繋がってきているわけです。

今日は、会場の4人のパネリストの皆さん、先ほど打ち合わせの会場でいろいろ話をしましたら、本番以上に大変に盛り上がりまして、皆さんにもそのときあたりから議論を聞いてほしかったなというふうな印象でありました。

早速ご紹介をしまいいります。そして、一言どういうお立場の方なのかわかるようなお話をさせていただこうと思います。

一番私の近いところから言いますと、熱海歌子さんです。南小泉パパネット推進協議会事務局を担当していらっしゃいまして、子どもとの触れ合いづくり、あるいは居場所づくりと同時に大人の居場所づくりにも取り組んでいらっしゃるといことです。具体的な活動は後でご紹介しますが、きもだめしやスタンプラリー、するめ天ばたづくりなどもこの前までやっていたそうです。では、熱海さんから一言ご自分のお立場とどんな考えを持っていらっしゃるのかお願いいたします。

熱海 ただいまご紹介いただきました熱海と申します。よろしく願います。

当初は、平成15年に「おやじの会」というものを発足しまして、お父さんたちだけの会だったのですが、PTAを熱心に活動されていた数々のお母様方から私たちも一緒にやりたいと、子どもと触れ合う場がもっとほしいという声もありましたので、パパネットという名称は残しつつお父様お母様方のご協力のもとにただいま活動させていただいております。

まず、私たちの活動の趣旨としましては、地域の子どもの居場所づくりを進めようということで、年に2回もしくは3回大きな行事で子どもたちを楽しませよう、それから、大人にも子どもたちが遊んでいる間に雑談や目配りをしながら、何のかわりもない会社の縛りもない、そういった大人の居場所づくりにもなればいいのかということで活動しております。中には、中学生のボランティアも含まれておりますし、その中学生が卒業した後、高校生になってからもパパネットとして活動したいということで部活等との問題もあるのですが、部活がないときにちょっと手を貸していただく、そういった活動を行っております。

市民センターを中心に活動させていただいておりますが、小学校の先生にも本当にお世話になりつつ活動しております。

今後も、ほかの地域の方々やほかの団体との活動を目標に交流を持ち、情報交換などができればいいなという思いがありましたので、そこを中心に活動していきたいと思っております。

相馬 後ほど補足をしてちょっと聞きたいと思いま

す。

お隣は、まさに「おとなりどーし」の代表でありませう後藤義光さんです。後藤さんの団体ですが、町内会ではできないことを自由にできる団体を目指すというふうなことを言っています。では少し活動の内容も含めてお願いいたします。

後藤 後藤でございます。私の団体は平成16年に、すっかり私たちの仙台市も高齢化を過ぎまして高齢ということがピタリということで、どこもご夫婦二人だけの高齢世帯になったというわけでございまして、この高齢者の皆さんを介護保険のお世話にならないように百まで元気で頑張ろうという支援をしようということで、現在私たちの団体は毎月1回のサロン活動、例えば健康体操、歌、お茶飲みとか要するにミニデイサービスをやっております。

それから、商店街で七夕づくりを行って、一つでも一種のまちづくりの一環にしよう。それから、団体が資金を得る意味で、通称で有償ボランティアとっておりますが、高齢者の草取り、これをお金をいただいて有償で行うというような活動も既に年150回くらい行っております。

それから、福祉バスを利用いたしましての移動サロンで、部屋の中ばかりいるのではなくて、郊外にもどんどん出ようということで定義山や泉ヶ岳や有備館、この前はニッカの方に約30名の団体として行ってまいりました。高齢者でございますので、どこに行くにも薬を持ったか、豊齢手帳は持ったのかとあって、ちょっと出かけるにもいろいろな準備と下見が必要でございまして、今年始めて3年目で気仙沼の方に1泊で皆さんに参加していただいたということで今後ともいろいろな形のもの、皆さんボランティアが経験しないこと、新しいこと、未知のこと、こういうことをやりたいとか、もろもろの要求を実現して一生懸命進めていきたいと思っております。

そういうわけで、お手伝いするボランティアさん、皆さん通称ボランティアと言いますけれども、私たちのボランティアはあくまで募集して手を挙げてお金を払ってでも奉仕しようという人たちのボランティアでございますので結束は強いものですから、今後も力強くこれで進めていきたいと思っております。相馬 ありがとうございます。

お隣は木町通市民センターの館長さん、八嶋敏郎さんです。お願いします。

八嶋 ただいまご紹介いただきました木町通市民センターの八嶋と申します。

私は3年前仙台市で館長の公募がございまして、そちらの試験を受けさせていただきまして館長になっております。

4年目に入ったのですが、1館目の市民センターが堤町にあります三本松市民センターでございました。その次が泉区にあります長命ヶ丘市民センター。その間に同じく泉区にあります根白石市民センターを5カ月間兼任いたしまして、今年の4月から木町通市民センターに勤めております。

私自身が今日お話しすることについては、これまで経験した4館が地域によって相当違いがございます。例えば、根白石は自然がいっぱいの農村部の市民センターでございまして、今の木町通はマンションや企業ビルが120以上ある地域の市民センターで、今年3月まで勤めていた長命ヶ丘は、がちがちの団地の中の新興住宅地の市民センターということで、それぞれ違い、特長があります。その中で市民センターはこんなことを考えていますよ、こんな役割を持っていますよというあたりを、今、市民センターが行っている施策などを皆さんにお話しできたらと思っております。よろしく願いいたします。

相馬 後ほど詳しくお願いいたします。

最後になりました。紅邑晶子さんです。せんだい・みやぎNPOセンターの常務理事事務局長です。このせんだい・みやぎNPOセンターですけれども、市民活動を支援するということを目的にスタートした組織ということでよろしいでしょうか。よろしく願いいたします。

紅邑 せんだい・みやぎNPOセンターの紅邑と申します。よろしく願いいたします。私も社会教育委員の一員でもありますが、今日はこちらの方のパネリストということでお話をさせていただきます。

今、相馬さんからご紹介いただいたのですが、今日パンフレットを皆さんにお配りした中に、サポートセンターのパンフレットと仙台市シニア活動支援センターという小さいパンフレットが入っていると思います。実はそのサポートセンターの中に入れ子のように3階のところに7月1日からシニアの方を対象に絞り込んだ場所ができたのですが、こちらの方の運営も受託して行っているという状況です。

私たちせんだい・みやぎNPOセンターが目的としているところは、市民活動団体の方たちの活動の促進と支援をするということで、私たち自身も市民活動団体の一つなのですけれども、その中で先ほどのサポートセンターの運営をしているというのもまさに市民活動団体の活動促進支援につながるという目的に合致しているので、これは仙台市がそういう施設を設置するに当たって公募がありまして、そういうことなら私たちがやりたいことが実現できるということで受託をしたのですが、その結果そこのいろいろな事業については、私たちもいろいろ提案をして仙台市と一

緒に、まさにパートナーシップでそういった運営に当たってきています。

それから、独自のせんだい・みやぎNPOセンターとしては、市民活動団体で一番困っているのは、「人、物、金」なんですけれども、そういったところの解決をしようということで、私たち自身もそんなにお金もないわけですが、それを支援するのが目的ということもありまして、資金支援ということではみんみんファンドという資金支援システムというのがあるのですが、そういう形で助成金を提供しますということで、これは例えば宮城県と一緒にとか、企業と一緒にということもしています。

物品の提供ということでは、企業で物が余ったりということがあると仲介してNPOに提供するということもしています。

情報支援ということでも、私たちのところでNPOの情報発信みたいなことのお手伝いをするということもしていますので、そういった組織として独自の事業もやりつつ共生の施設の管理もそのノウハウを生かしながらやっているという団体に活動しております。よろしく願いいたします。

相馬 熱海さん、先ほどお名前のネーミングのところでもちょっと触れていらっしゃいましたが、パパネットという名前をずっと残していらっしゃるのですが、これは特に何か意味があるのでしょうか。

熱海 パパネットというのはお父さんたちだけの「おやじの会」というのが各小学校にも増えつつあるのですが、「おやじの会」じゃつまないだろうというお父さんたちの言葉がありまして、それでパパネットというネーミングになったみたいなのです。当時、私はまるっきりかわかっておりませんでしたので、パパネットというと仙台市内でもそうそうない名前だと思うんですね。それで、パパネットなんだけれどもお母さんも入れるよ、みたいなお父さんとお母さんのネットワークづくりのような意味合いも兼ねております。

相馬 問題点の中に、一つは資金面をどうしようかというところがあると思うのですが、その辺は現状はいかがですか。

熱海 現状は、生涯学習課から「学びのコミュニティ」の資金の援助をいただいております。今年3年目で終わるのですが、その後どうしようかという問題もありまして、活動を行うに当たって今は大丈夫なだけけれども、きもだめしでも大きな行事は今はできるけれどもこの活動資金がなくなったときに果たして同じような行事ができるんだろうかという不安感というのは会員全員が持っております。

相馬 額を聞いてよろしいですか。

熱海 年間20万いただいておりますので、大体年2

回のときは10万ずつの予算で行っております。

相馬 後藤さんのところは、有償ボランティアというお話もありましたけれども、これはどんなことなんでしょう。

後藤 一般的に、高齢者の草取り、要するに私たちNPO団体は、今資金の話も出ましたけれども、何だかんだ言いましても団体をつくる上では資金と人ということで、資金が大事だと。そうすると一番やりやすいのは、高齢者の草取りと。ではただでやるのかというわけですが、そうではなくて、例えばうちの場合ですと1時間1,200円いただいて大体1軒の家に3人ぐらいで2時間で終わると。要するに一人でやるということはありません。行っている方は60代の方ばかりでございますので、一人で行って倒れたらそれまででございますので、必ず二人以上で行って大体2時間ぐらいで終わって来て、例えば1万円いただいたときは、5,000円はやったボランティア、残り5,000円は団体に入れてもらうというような形で資金をつくっております。これは、大体年間40から50軒ぐらいでございますけれど、あとそのほかに今言った助成金とかもろもろという形でやっております、ようやく全部の予算が100万円ぐらいになったというような状況で、何となく若干余裕が出たとはいうものの、これからいろいろやる上ではまだまだ資金が大事じゃないのかなと思っております。ですから、草取り以外は何ができるかというと、それは一般の家庭の奥さんでございますので、残念ながら草取りが一番適しているという状況でございます。

相馬 参加をしていらっしゃる方々の年齢ですが…

後藤 大体60代が主力でございます。関東の方は大体70から80代のボランティアさんがおりますけれども、残念ながら75を過ぎると年寄りだと自分では錯覚しておりますけれど、やはり80になっても90になっても元気な方はまだまだボランティアがやれるということで、これからの世界は70、80代の時代と私は認識しております、みんな頑張っただけで倒れるまで頑張らましようと言っているんですけども、時々バッシングを食っているということです。

相馬 八嶋さん、公募の館長さんというご紹介がございました。公募ですと競争して手を挙げてということになるんでしょうけれども、ほかの官が選ぶ館長さんとの違いは何でしょうか。

八嶋 公募だから市役所OBだからというふうな違いは何とも言い難いところはあるのですが、公募であろうがOBであろうが、赴任した館でいかに地域を知って、その中で何かを考えていくという、地域づくりの意欲が問題になってくると思います。私はよく職員に言っているのですが、ひとつの見方として市

民センターはサービス業であるということです。いらっしゃる方はお客様だということで「おはようございます、いらっしゃいませ」と挨拶します。私、最初に市民センターに入ったときに「いらっしゃいませ」という言葉を言ったら職員が怪訝な顔をしていたということがありました。でも実質的に1年たつとみんな「いらっしゃいませ」という形になって、スムーズなコミュニケーションが取れるようになりました。その辺が私のこだわりのスタートだったのかなと思っています。公募とOB館長ではその辺の違いは、もしかするとあるかもしれません。

相馬 4館経験なさっているわけですね。さっきのお話ですと、根白石あたりのところでいろいろチャレンジなさったりして、住民に溶け込んでいったようなお話でしたが、ちょっと具体的にお話しいただけますか。

八嶋 まず、市民センターに入る前には1回か2回、受講生として市民センターには行ったことがあったのですが、2週間の研修は富沢市民センターに行きました。センターは朝から1歳2歳の幼児を連れてお母さんたちが大挙して来て遊んでいるんですね。これが市民センターなんだと勝手に解釈しまして、三本松市民センターに赴任いたしました。ところが、何日かたっても子どもの声は1回も聞こえないんですね。この市民センターの利用者の中心がほとんど70歳を過ぎた高齢者で、毎日のようにお茶飲みを楽しみに通ってくる市民センターだったわけです。その後、長命ヶ丘市民センターに転勤になりました。そこは団地の特性を生かし、ものすごく地域活動が盛んなところでありまして、町内会活動も活発で地域づくりが進んでいるようでした。その中で、私はここに何をしに来たのだろうと自問しながら、いろいろ考えた末、地域で活動している人はいっぱいいるものの具体的には見えてこない、活動しているグループや内容を調べて、地域活動の年間カレンダーを作ることにしました。グループの縦の活動を把握して、グループ同士の横のつながりを促進することにより、活動と活動を結びつけるとおもしろい活動になると思えるような講座を開設しました。長命ヶ丘では、それが今うまい関係で進んでいるのかなと思います。

根白石市民センターは、5カ月間だったということで、そんな深くは関われなかったのですが、ただ、街や団地の中の市民センターと違って、自分たちが学習するというよりも自分たちの資源や技術を利用して、教えてあげるから、根白石にどんどん来なさいと全市に呼びかけて、他地域からの方たちと一緒に農業体験や自然体験を通して自分たちの地域づくりを促進して、社会還元型の講座が中心の市民センターだったか

なと思います。

相馬 紅邑さん、いわゆる市から受託をして運営に当たるといっているわけですが、行政との関係、いわゆるNPO団体、特にセンターを含めて運営をしていくというわけはその辺はどういうスタンスで考えていらっしゃるのでしょうか。

紅邑 先ほどお話ししたところにもあるのですが、もともとは自分たちで市民活動団体の活動の促進や応援をするということが目的で立ち上げた組織で、自分たちでそういう場が提供できたりとかそういったことの応援ができるお金があったら自分たちでビルでも借り上げて、そこで今サポートセンターのやっているような事業を自分たちでほんとにやらなかったというところですが、残念ながらそういうお金ももちろん立ち上げたときはございませんでしたのでどうしようかと思いましたが、そういった中で行政としてもこれからの公共サービスというのは、行政だけではなくある意味もっと市民と一緒に、もしくはそういった公益サービスをしている市民活動団体と一緒にやっていくということを仙台市でもちょうど考えていた時期でもあり、私たちがそういうことを行政が考えるべきだと提案もしていたんですけれども、そういったいきさつからのサポートセンターというものを仙台市が作りますということを決めまして、その決めることに当たってどんな施設であつたらいいかということについても市民と一緒にいろいろな会議を開いて協議をしていったところ、市民活動を応援することに精通している団体に任せられた方がいいんじゃないかということになって、公募をして決めようということになった中で私たちが応募した団体の一つということで手を挙げて、選考の結果選ばれたといういきさつがあります。

選ばれたときも、実は市としてはこういった金額でこういったサービスをしてほしいというようなことは委託ということで提示されていたのですが、私たちがそこで提示された委託料というのは、自分たちがもしやるとしたらということで積算した金額とかなり乖離していたので、それは改善してほしいという条件をつけて手を挙げたところだったところが採用になったので、そういった意味では、今まで委託という関係だと、言われたことをそのとおりに実施するのが受託する側だったのですが、私たちの場合は、かなり行政と対等な関係を求めてそういった事業に当たるといふようなスタンスをずっと貫いてきているので、場合によっては担当の部と意見が対立するというようなことももちろんありましたし、そういうときは非常にお互いに議論を尽くして納得ができるところで実施していくというようなことでいうと、今までにない

形でのパートナーシップと今でこそ言っておりますが、そういった関係で行政とのつきあいをしているという状況です。

相馬 行政との関係で言いますと、何年か前、たとえば仙台市と紅邑さんたちの団体でお話し合いをしたとすれば、今のような形にスムーズに行けたでしょうか。かつて、昔の仙台市の話で言いますと、その辺はどうですか。

紅邑 多分、今現在もそれがすべての部署でうまくいっているかといったらそうでないところもあると思いますが、ただ公共のサービスというふうなことの提供者というのが財政的な問題だとか行政改革とかそういったところからいうとある意味外に出していくというような傾向が全国的になってきているので、その中で協働という形で、お互いに汗を流して一緒に事業に取り組むというようなことも増えていて、仙台市では、藤井市長時代のときには市民協働を推進し事業をやっていくという方針が出ていましたので、それに基づいてかなりそういった取り組み方というのは仙台市でも増えてきていると思います。

相馬 後藤さん、有償のボランティアということですが、商売ではないわけですよね。その辺をもう少しお話しいただけますか。

後藤 今いろいろな福祉団体も表に利益を出すというのは、私たちのNPOというのは特定非営利活動法人ということなんですけれども、団体を維持して行く上では、例えば会場にいらっしゃる方でも何か立ち上げてつくる場合には資金がかかるわけです。必ず。ただということはありません。助成金というのは当てになりませんので、集まった人たちで資金を出し合って立ち上げるという形になります。

ただそうしても継続する上では資金がかかるので、何らかの、俗に言うコミュニティビジネスといいますか、この草取りも一種のコミュニティビジネスです。現在うちの方の内容でやっているのは、草取りとか犬の散歩とか高齢者のお掃除とかもろもろございますけれども、何年か前までは出張してカラオケ同行などいろいろあったのですが、どうしても資金がかかるものから、ボランティアをする皆さんが集まってお手伝いする人たちがあくまで本来のボランティアの考え、つまり先ほど申しましたとおりにお金を出してでも皆さんにお手伝いをしますという集団だからこそこういう少ない資金でやっていけるんじゃないのかなと思うわけでございます。

ただそうは言っても、最低限かかる費用ぐらいは出したいなと思っておりますので、現在はアルミ缶回収などいろいろな資金の元を考えてやっていきたいと。それはぜんぜん商売にはなりません。ただ、地域の町

内会長さんやリーダーの人たちは、何となくまだ儲けてやっているんじゃないかという頭があるわけでございまして、会長さん方、それからいろいろなリーダーの人がNPO団体は違うという認識がまだまだないというのは残念というかこれから皆さんに納得していただく問題じゃないかと思っております。

相馬 補足をして、例えばかつてですと、まさにお隣同士がいろいろと助け合いをして生活を築いていったということがあったと思うんです。ところが、最近なかなかそういうことも、マンションが増えたりとかそういう状況になってできないことになりましたよね。そのことと町内会の役割があんまり機能していないのかなという感じもするのですが、その2点いかがでしょうか。

後藤 事務所的にはそれぞれの代表の自宅を事務所にしてはいますが、町内会自体は、従来どこでも町内会組織というのは運動会や盆踊りなどやっております、それ以上のことはあまりしていない。つまり、町内会はあくまでお手伝いお願いされた方たちですから、ボランティアはボランティアなんでしょうけれども、私たちのボランティアはそういう意味ではなく、手を挙げた人たちでやるということで、そこら辺の違いがかなりいかなものかと思っておりますので、今後ともボランティアに対しての考え、町内会はボランティアなのかと言うとそうとも言えないということもあるので、そこら辺の兼ね合いがまだまだ認識を得ていない点があるのかなと思っております。

相馬 熱海さん、お父さんたちの活動のことですけれども、やっぱり仕事を持ってなかなか出にくいという状況があると思うんですね。その辺は埋めようという気持ちもあるんですか。

熱海 私たちは、「いつでも誰でもできるときに」というのを目標にしております。なので何月何日に会議があるので必ず来てくださいという言い方はしないんですね。何月何日に会議があります、何時からになります、そういった連絡だけを行いましてスタート時間から5分ぐらいはみんなで雑談をしながら待ちますが、5分たった時点で今日はこのメンバーで決めましょうとそういった形になっております。縛りがあると、仕事とパパネットとどっちを取ったらいいのかと悩まれるお父さん方が多いと思うので、今お母さん方も夜遅くまでお仕事なさっている方もいらっしゃいますので、本当にいつでもいいですよ、誰でも受け入れますよ、都合のいいときにちょっと手伝ってください、当日だけでもいいですよという形で運営しておりますので、実際に会議に毎回来ていただいている方というのは10人未満です。

相馬 学校との関係で言いますと、活動の拠点は学校

だけではないと思うんですけども、学校行事との連携とかその辺はどうでしょうか。

熱海 学校には、何月何日にパパネットでこういった形で行事を持ちたいのですがということを校長先生にお願いをしまして、校長先生がいいよとくださることが多いのですが、一昨年は学校に泊まるということ、例えば非常時、地震や大災害があったときに学校というのはほとんどが非常避難場所になっておりますので、そこで泊まる体験をしようということで子どもたちと一緒に寝たのですが、子どもたちのアンケートから見ると、学校の床で寝るとこんなに背中が痛くなるんだとか、みんなで寝るとことはもしも大きい地震が来たとしたらここに大人の人も入るからもうちょっと私たちは小さくなっていきやいけないんだとか、そういう体験もさせてあげられたので本当に学校とはうまくコミュニケーションをとって活動させていただいております。

相馬 協力の度合いもいろいろあるのではないかと想像するのですが、その辺どうでしょう。学校の協力の度合いは。

熱海 パパネットの会員になってくださっている先生方もいらっしゃるし、市民センターの先生方がうまく私たちと学校側との橋渡し役になっていただいているということで、市民センターが私たちの活動にとっては重要な役割を持っていただいております。

相馬 八嶋さん、市民センターの役割も重要だというお話がありました。先ほど四つのところを経験なさって実質的に事業を立ち上げるというところで、今までの市民センターと内向きのところと外に向けた活動の仕方と何か違うような感じもして話を聞いていたのですが、その辺いかがでしょう。

八嶋 市民センターには幼児から高齢者までターゲットになるわけですが、パパネットについては、小学生のお父さんお母さんが小学生を見守るだけでなく、高齢者の見守り分野のボランティア活動も町内会に組織されています。先ほど問題視されておりました町内会活動はどうなっているんだというふうなことを含めると、町内会活動は高齢化が進んでまして、会長も高齢者の方が多く、なかなか後継者が見つからないという話も聞きます。市民センターから見ますと町内会活動も一つの活動で、ボランティア活動も一つの活動で、パパネットも一つの活動で、そういう活動が複合しあって子どもたちを見守る環境を作っていくのだと思います。剪定をするボランティアがいたり、ほか色々な活動をしている方が縦に動いているんですけども、それを見極めながらその人たちの横のつながりを取り持ちネットワークをつくることによって、新たな地域活動が生まれると私は思っ

ているんです。そういうふうな形で市民センターが、パパネットと一緒に色々なことをやったり、今度は学校とパパネット、今度は企業と学校というような形で、地域にある有用な財産や活動を結びつけていけるのが、市民センターの一つの役割と考えています。

それが今うまくいっている所もあれば、そうでない所も結構あると思います。私は4月から木町通市民センターに赴任したのですけれども、木町通は町内会活動というのが崩壊しつつあるという地域で、老人クラブもなくなったり120あるマンションの1棟1棟が町内会になっております。そういう面で町内会活動も会長さんの家だけが1戸建てで、あとはみんなマンション住まいというような地域なものですから、市民センターはこうあるべきだということは一口には言えないんです。地域によって連合町内会が二つある市民センターだったり、一つの市民センターに小学校が三つあったり四つあったり、中学校が二つあったり一つしかなかったりと地域によって違うものですから、まずその地域を調査し知ることによって、地域で活躍している人材をつかんで、それをうまくその地域の活動に結び付けていくというのが、今市民センターがやるべき方向なのかと思っています。

相馬 紅邑さん、これまでの活動をインターネットなどで拝見しますと、ポイ捨てゴミからまちづくりを考えるキャンペーンなんていうのがあったりしまして、行政がある意味では手の届かないようなところにNPOが手を伸ばして行って、それを活動につなげているようなそういうことも幾つかあるのではないかなと思うのですけれども、活動のよって立つ視点、どんな目で世の中のまちづくりを考えてらっしゃいますか。

紅邑 私自身はもともとの市民活動というところからこの活動に入ってきたわけではなくて、NPOって何だろうというそこから入ってきたりしたものなので、自分でそういったことをどうスタートしているかということで今のご質問に答えるとしたら、組織に入ってからというところでは私自身というよりは、市民活動の大体の生まれ方ということで言うと、たいていは一人の個人がこれは問題だと思ったとか、これをどうにかしたいと思って、そのことについていろいろ情報収集したり、勉強したりした。その勉強する場所として市民センターだとか行政施設がやっている講座や、場合によっては市民活動団体がやっている講座などもあるわけです。そういうところに行って勉強して、そこで一緒に学んだ仲間や同じような思いを抱いている仲間を探して組織をつくる。その場合は、自分と同じ問題を抱えている人同士でつくる場合もあるし、そういうことに共感してくれた人を巻き込んでそう

いう組織をつくるということもあって、今度組織ができたらそのことについて一緒にどうやったら解決できるだろうと動いていくことで、それがあある意味、市民活動の団体になっていくと思います。

ですから、先ほどのパパネットさんの場合も、多分最初はお父さんたち同士で子どもたちという共通のつながるキーワードがあったところで「一緒にちょっと飲んでみっぺし」みたいな感じになったところが、結果的には、「何か家の近くでこのごろ不審者もいっぱいだからパトロールすっぺが」みたいな感じになって、それで終わった後に「一杯飲みましょう」なんていうことから、もっともっと楽しいことをやろうよというようなことになり、あんまりおもしろそうなんでお母さんたちも混ぜてね、というふうになってという意味では、問題提起というよりサークル的な形で動いているということだと思うのです。結果的には、それが地域社会の問題を解決するというに変化していているという動き方もあると思うし、後藤さんのところのように、同じような高齢化してきたというように、何か一緒に高齢者の人たちでできることはないかと、生きがいづくりをしてみようとかそういうふうなところの共通項があって、その団体ができていってという生まれ方もあると思います。

ですから、プロセスそのものが、今日のテーマでいう社会教育って何だかわかんないというふうになって、どちらかという市民センターが提供している催しが社会教育だと思われがちだし、私も実はこの社会教育委員の会議というのに入って初めて社会教育って言葉を知ったんです。生涯学習というのは聞いていましたが、それも単に行政の公共施設でやっているカルチャー教室みたいなものなのかなというイメージが強かったんですけれども、この委員に入って、前期に調査を実際に、市民センターでの事業とか市民活動団体でやっている事業ということについて委員の方たちと一緒に話を聞きにいったら、何だどっちも社会教育じゃないって話になったところで、今回のコミュニティとの社会教育ということになってきたということと言うと、市民活動のやっている取り組みもまさに社会教育だと私は思っているの、そういった人たちのところに私も同じような形でかかわっていると思っています。答えになっていなくて申しわけないのですけれど。

相馬 冒頭でも皆さんにお願いしましたが、アンケートということではありませんけれども、この議論の中に反映をしていただくために紙を回しております。お書きいただいて後ほど回収させていただきます、それも議論に反映させたいと思っております。

後藤さん、活動ですからある意味ではずっと続いて

いってほしいという願いがありますよね。後藤さんは、大変失礼ですが60代でいらっしゃる。そうすると若い後継者というんでしょうか、そういうことはどういうふうにお考えですか。

後藤 そのためにNPO法人を立ち上げたものでございまして、組織でいかないと個人の仲良しグループではそのリーダーが具合悪くなったり、あるいはいなくなったりしたときは崩壊になるというのが大体の形でございます。そのために法人を立ち上げて、現在いる会員の中から次の方がすぐ代わりになるというような形、つまり組織力ということでやっているというのがNPOを立ち上げた一つの要素でもあるということでございます。

相馬 具体的には、そういう人材は育てていらっしゃるわけですか。

後藤 皆さん一般に若いのが後継者だと言われますね。ところが、私たちこのような高齢の社会になったときに、この間どこかの町内会長の聞いたのですが、役員、班長回ったらとても私たちは年とったからやれないと。「歩けるの」と聞いたら「歩ける」、「車は」と聞いたら「車は運転して買い物にも行く」というわけです。ですから、みんな錯覚しているんですね。80代になったらもう年寄りで動けないんだといいますが、私も、まだまだ理想的にはいくつになっても現役のボランティアで人のためにやれるよという気構えを持つ人ですから年ではないと。年なのは大体、国会議員とか議員さんが定年を決めておりますけれども、私はボランティア活動においては、あくまで年齢に関係なく一生懸命やる、頑張る年配の方が一つの後継者と思っております。ただ、一般的には若い方がいいんだと言いますが、今、70代のリーダー、いろいろなNPOの団体にいきますとすばらしい70代の人たちがいっぱいいるんですね。もうとてもとても考案的には40、50代の考えと顔の色を見てもつやもいい、どういう生活をしているかはわかりませんが、元気な人がいっぱいおります。そういうのを見た場合、これは年でないかと、ボランティアは一生懸命やる人たちが80になっても90になってもお世話する側に立つのが大事じゃないかなと思っております。

相馬 熱海さんのところは、そういう意味では活動を持続するために取っていらっしゃる手段などありますか。

熱海 まず問題点になるのですが、今、小学校の方を中心に事務局で動いておりますが、子どもというのは日々成長するもので、パパネットのメンバーが卒業してしまつたときに果たしてどういった形でこの組織を残していくべきかということがまず第一の問題で

ありまして、そのために新規の会員を毎年募集するのですが、名前だけで一度も会議に来ていただけないという方も中にはいらっしゃるんで、今年度から議事録をつくってみることにしたんです。そうしまして、現在こういう形で次の楽しい行事に向けて話し合っていますよ、ということを会議に出席していない方でもわかるように。そうすることによって、低学年、中学年の方々がこの活動を続けていただければいいなど。私たち長くいるメンバーはそのサポート役に回っていただければいいんじゃないかなと考えております。

相馬 紙で渡していくわけですか。情報を。

熱海 はい。紙で学校の方で刷っていただいて、各学校、中学生もおりますし、高校生などですと郵送になります。会員に必ず送るといふ、今年から決めたことですが。

相馬 八嶋さんのところでも市民団体の皆さんが施設を利用なさって活動しているケースが多いと思うんですけども、館長さんの立場でそういう活動を見ていって疑問点とか、あるいはこういうふうに変更したらいいのではないかと、ということがあったらお話をいただけませんか。

八嶋 私自身がこの公募の館長の試験を受けたというのは、30代に民間のカルチャーセンターに勤めていまして、その時の仕事が大変自分の性格に合っていました。30年前でございまして、カルチャーという言葉も生涯学習という言葉もあまり一般的には使われていない時代でした。そんな時代でも、その時3,000人ぐらいの会員さんが毎週のように通ってくるわけです。自分自身の技術を磨いたり、自分自身の生きがいを見つけるためにということで、その目は輝いているんです。夜はほとんどが若い方で、昼間は中高年の方がいらっしゃり、その目の輝きと姿を見まして、私自身のやっている仕事の重要さを知りました。自分づくりや生きがい作りのきっかけを提供する。このことが、公募館長に応募した起点になっているわけです。

今まさに市民センターでは、サークル活動が盛んな地域がたくさんありますが、見ているとその仲間づくりのサークル活動が地域を作っているのではないかなと思っております。

サークルが地域を作って、そのサークルと別のサークルの触れ合いがあったり、その人々が別のサークルに入って新しい別なサークルができたりということを繰り返しながらやっているものですから、特に今現在問題点というのは余り感じておりません。実際、生き生きとして活動している人の支援というのが、市民センターの一つの役目でございます。そういう面では

うまくいっている館もあれば、そうでない館もあります。とりあえず、方向的には地域のサークル活動の推進とリーダーの育成、そんなところに向かっているのが市民センターだと思います。

相馬 市民センターの利用の形態を少し見えますと、例えば一定の地域でその市民センターに集まるというよりは、全市的にある館に集中をしたり、あるいは市外から利用のために申し込むケースが最近だんだんふえてくるというような傾向にあると思いますけれども、どうでしょう、地元にある市民センターが、ある意味ではそういうサービスをずっと上げていかざるを得ない状況が現実にあるわけですよね。そこはどうでしょう。

八嶋 先ほど申し上げましたように木町通市民センターでは、たまたま4月に赴任しまして2ヶ月間どうい人が利用しているんだろうということで調べてみたんですけども、団体として150団体が使っているんです。市民センターとしては150団体が2ヶ月の間に利用するというのは結構多い数字なんです。大体80団体ぐらいのところだと思のですが、その中の内訳を調べましたら、150のうち50団体が会社の会議で使っているんです。たまたま木町通市民センターは、周りに会社が結構ありまして、それも一つの地域でございますのでそれはそれで一つの方向なんですけれども、実際地元の町内会活動というのが使っているのが10件ぐらいしかなかったんです。

それ自体は先ほどもおっしゃいましたように崩壊気味の町内会ということに象徴されてくるんですけども、サークルはそれぞれ全市から。地元のサークルはそのうちの40~50件ぐらいしかありません。そのほかは全市からです。地下鉄の駅から近いということもあるんですけども、そういう意味では旭ヶ丘や黒松などが全市から集まる人が多い市民センターだと思います。団地の中にある市民センターはいろいろな工夫をしているのですが、地域の人たちが70%60%の参加率だと思っています。

相馬 紅邑さんのところは、いろいろ活動支援をなさる仕事をいらっしゃるわけですけども、そういうことで見ていって、例えば資金の話、リーダーの資質の問題とか幾つか問題点が出てきそうな感じもしますけれども、ご覧になってこういう活動をもっとちゃんとしていけば、もっとこの市民活動がいい形でいくんじゃないか、そういう問題点についてどういうふうに思っているんでしょうか。

紅邑 その前にちょうど今八嶋さんがお話ししたことにつながるとは思いますが、私たちが管理運営をしている市民活動サポートセンターは、まさに全市から集まるという場所ではあるんです。公共施設ってど

ういう役割を果たすべきなのかということではないかと思うんですね。市民活動をしていく上でも、一番困っているものというのは、お金というのは確かにあるんですけど、もう一つは活動する場所の問題で、自分たちの事務所が持てるかだとか、そういう活動をする話し合いをしたりできる、会議のできる場所があるかとか、そういうところが近くにあるとか、集まりやすいところにあるか、ということだと、その団体がかなり地域を限定して活動している場合の場としては、市民センターということになるとは思いますし、もう少し全市的な形で活動する人たちがいるという場合は、中央部ということでサポートセンター、もしくは中央市民センターなどになると思うので、公共施設が場の提供をどういうふうにしていくのかということ、もしくは市民がそういう場をどういうふうに使いたいのかということにどうやって答えていくのかということがこれから大事で、「ハンズオン埼玉」というところが出している本があって、「私のだいじな場所」というタイトルだったと思うんですけども、それはまさに公共施設を市民が自分たちの活動拠点としてもっともっと活用していくためにはどうしたらいいかということについて、いろいろな方が意見を述べているんですけども、ちょうど私がいただいている資料で八嶋さんが、自分が考えている市民センターの役割というところに、市民センターを来館するしないにかかわらずその地域に生活する市民の心の拠りどころにならなければ、と書いていらっしゃるので、その辺のところからこれから公共施設もしくは市民センターのあるべき姿ということで、今回の話の中でもつながっていくかと思えます。

市民活動の中心になる方に大事なものは、経営センスではないかと思えます。先ほどから後藤さんもボランティアということと有償ボランティアというお話をされているのですが、みんなお金がほしくて活動しているというわけではないのですが、場合によってはお金を払って仕事をお願いした方が頼む方も楽だったりするという場合もあったりすると。それから、もう一方で組織を運営していくということは、ただでは運営はできないわけですよね。その分の資金をどうやって調達するかというのは、企業以上にNPOってすごく難しいんです。大体NPOの財源というのは、一つは会費とって一緒に活動している人たちがお互いにお金を出す、それから寄附をいただく、助成金をもらう、補助金をもらう、そして事業を自分でやるということの中に委託事業があるということがあったり、自主事業があったりということなんですけれども、助成金というのは限られているので時期も金額も内容も限定されているということでは自由に使えるお金をどれだ

けつくるかというところでは自主事業をどれだけするかということなのですが、一方でボランティアというのは、実は無償でただの人足で扱うということではなくて、自発的にその活動にかかわりましょう、かかわりたいという人たちの思いであって、ただで仕事をしてもらうことはあるんですけど、例えばそれをもし、お金を払ってやってもらったとして換算したら、それはかなり大きな寄附をしてもらったとイコールだという考え方なんかもちながら組織の運営ということを考えていくともう少し市民活動ということについての運営の仕方というのが難しいといいながらもおもしろくなっていくんじゃないかと思っています。

相馬 ありがとうございます。
議論を始めて大体1時間ぐらいたった段階ですけれども、会場の皆さんから書いていただいた分が今2通手元にありまして、幾つかあるのですがご紹介しましょう。

セミナーのテーマである「学び」とは何か。学びがなくなるとコミュニティにとってどうなるのか。どんな社会教育が地域に役立つのか。なぜ「学び」が必要なのかを話してほしい。

そのほかございますけれども、参加の皆さんも「学び」というのはどういうことなのかということをもしよるしければそれぞれお話しただいて、議論をまた展開しようと思うのですが。

熱海さん、この「学ぶ」というのは一体どういうことだというふうに普段考えていらっしゃいますか。
熱海 私どもパバネットでは、学ぶということは昔の遊びを子どもたちに伝えていくこと、普段できないようなことをさせてあげること、それを学びと捉えております。ですから、今年2月に泉ヶ岳の方にスキーツアーの活動をしたのですが、今の子どもたちというのは、暖冬だったということもあるのですが、雪がどれだけ湿り気があって重たいのかとか、さらさらした雪はどうかかなどそういった形がわからなくて、湿った雪のところでは一生懸命そり遊びをしていたりするんですね。それは違うんだよということを教えてあげたりとか、仙台風の会の方々に協力していただきまして凧づくりも一度したことがあるのですが、まず手先が器用ではない。一人で凧がつかれない。そういったことを学ぶという意味で捉えております。

相馬 後藤さんは、この「学ぶ」ということは一体どういうことだというふうに、あるいは「学びをつなぐ」ということはどういうことだとお考えでしょう。

後藤 私たちはほとんど高齢者の方たちでございますので、いろいろな面で経験の深い方ばかりですけれども、なかなか仕事を長いことやっていらして退職してボランティア団体に入る方が多いもので、自分の仕

事しかわからないという状況の中で、まず地域の人たちとの、つまりボランティアの人、サロンの参加者の人たちとの人間的な付き合いから始まって、自分が長年やってきた仕事とは違う面のいろいろなことをこれから学んでやっていこうということが男性陣ですね。それから女性陣は、男の方と違いますがまず学ぶというか習うといいますが、現実には常に手帳を持っておりまして、この日はサロン活動この日はセンターに行ってフラダンス、次は食事会に行くといういろいろな予定をぎっしり書いて活動する。ですから男性と女性では考え方が全然違いますけれども、実践的に私たちは女性も男性も今やっている活動が一つの学ぶ面になるのかなど。ある程度60を過ぎますと、あんまり難しいことを学んだりしても眠くなるのが大体でございますので、意味がどのように考えているのか私もよくわからないのですが、ただ皆さん体でもっていろいろな体験をして、いろいろなところに行ったり話したり聞いたり、それが今すべて学びにつながっているのではないかなと思っております。

相馬 順番で八嶋さん、いかがでしょう。

八嶋 先ほども申し上げたのですけれども、民間でやっているカルチャーセンターでの学びというのは、自己啓発であったり、技術を磨いたり、生きがいを見つけるということで、とにかく仲間づくりよりもむしろ自分を磨くというところで方向が強いと思っています。

今、市民センターでの学びを考えますと、当然一人一人の学びの楽しさを知っていただくことが前提なのですが、知っていただいた学びを仲間づくりというふうなところに結び付けます。私たちはそういう仲間づくりの事業をどういうふうにしていくかということを考えております。その仲間づくりができたことによって地域がどういうふうに変わっていくかなど、事業企画をする前にはその評価ということまで考えます。この事業をやることによってこの地域はこういうふうになるのだろうか、もしくは、受講者はどういうふうに変わっていくだろうかということをご想定しながら事業企画をして、それを展開していくことによって地域づくりのための学びが実施されています。13年度から「仙台ひと・まち交流財団」が指定管理者になって市民センターを運営しています。その指導のもとで私たち市民センターは19年度的重要事業施策としては「学校と地域の連携事業」というのがあります。もう一つが「学習成果を社会に還元する事業」でございます。さらに2、3年前から頻繁に出てくる「市民参画事業」が上げられます。その中には懇談会や市民企画というものがあるのですけれども、事業開催の念頭には「地域」があり、地域づくり

のための学習を中心に、今展開しているというのが現状です。

相馬 紅邑さんはいかがですか。

紅邑 私は、今、八嶋さんの話を伺って、まず個人の学びというのがいろいろな機会としてあると思います。それは民間のカルチャーセンターだったり、今市民センターで行っている事業の中だったり、場合によっては社会学級だとかいろいろ学びの機会というのはたくさんあると思います。その中からそれぞれが個人で選ぶ場合もあるし、地域に居住しているということによって強制的にそこに行くことによって学ぶということもあると思います。

もう一つは、私が先ほどから申し上げているような市民活動の場合は、自発的にそういった問題に気づいて、それが地域の課題という場合もあれば、社会的な課題という場合もあって、一緒に問題について学びあっていく結果、そういったものを社会に還元していくということが出てくると思います。そういう意味で、社会教育ということの中でも、これから注目していくとしたら、地域の課題解決行動みたいなことも視野に入れていくことだと思います。そこから活動しながら学ぶ場合ということと、学んだものを社会に戻していったそれが循環していくということも学びと言えると思います。また、その学ぶ場こそがもう一つの地縁ということではなく、テーマ型のコミュニティということでもあるかと思っています。

相馬 議論をもっと深めていくにはちょっと時間が足りないのですけれども、例えばさまざまところで今日おいでの皆さんはそれぞれの活動をなさっていますが、継続をして発展をしていくために何が必要なのかというあたりに議論を進めていきたいと思っています。

熱海さんのところは、先ほども継続のところというところと幾つか課題も出てきたという感じもいたしますけれども、その辺いかがでしょうか。

熱海 資金面がまず第一なんです、そのほかにできれば各町内会の方々にも声がけしていただいて、パバネットという組織をわかっていただいて、その上で会員じゃなくてもいいけれどここまでだったらできるよということと子どもの登下校の時間に合わせて散歩をしてくれたりとか、犬の散歩をしてくれたりとか、お花が好きな方でしたらその時間に合わせて水をやっていただくとか、そういった形での参加も視野に入れてほしいなと思っています。

そうすることによりまして、地域の防犯力にもつながっていくと思うんです。今の子どもたちというのは本当に危険なことがたくさんある社会に、残念ながらそういった社会の中で生活していかなければいけな

いので、そうすることによってあのおじちゃんがこの時間帯にいるから大丈夫だと、子どもに安心感も与えてあげたいということも考えております。

相馬 具体的にはまだ踏み出していらっしゃるということですか。

熱海 そうですね。まだ今は、取りあえず秋の行事のことで頭がいっぱいというか、行事の面で議論している最中なので、これから先、そこまでできればいいなということです。立地条件がいいものですから、小学校、中学校、市民センターと合わせて各町内会の方々とともに地域を活性化できればいいんじゃないかなと、その一端を担えればいいのかと思っております。

相馬 後藤さんのところ、小さなグループということだけではなくて後藤さんからご覧になって、同じような団体の皆さんが活動を続けるために何が必要かという点ではどうでしょう。

後藤 先ほどからお話しているとおり、まず団体を続けるには資金と人材ということの二つだと思っておりますし、またそれを心がけているわけなのですが、いろいろな点で人から聞くことも大事ですが、自分で考えてついたり、お話しして増やしていかなるを得ないのではないかなと思っています。これから私たちの団体がやることとしては、地元の福祉関係の方たちとの連携で地域のまちづくりの福祉ネット、いろいろな団体がございます。介護事業、ボランティア団体、そのような方たちと連携して地域のまちづくりの福祉ネットを立ち上げていろいろな事業を行ってきたいという希望がございます。

それから、他のいろいろな子ども関係、小中学生高校生の人たちとのいろいろな面でのかわりあいも今後持っていきたいと思っております。

相馬 八嶋さんに質問も含めてですが、非常に前向きに活動なさっていますよね。なおかつ成果も上げていらっしゃるのですが、例えばそういうところだけではないという印象も実は市民センターについて受けることもあるんですね。そういう点でいうと、例えば市民センターの職員の資質はどういうものであらねばならないのか。そういうふうな点ではどうでしょうか。厳しいですけど、その辺いかがですか。

八嶋 職員の資質等についてお話しするのはないんですけども、今おっしゃったように市民センターごとの温度差があるのかなと思っています。実際、前職の長命ヶ丘市民センターとまだ4カ月目の木町通市民センターでは、地域に対する取り組み、働きかけ、地域の情報の収集を含めてですが、木町通り市民センターが劣っていると思います。これからやろうということで、センター全職員で地域調査を開始しました。

地域の中で一番来館の多い年代は、20代、30代の

親子連れで、木町通市民センターは児童館が併設されている関係上、0歳から未就学児を抱えたお母さんたちが、朝から行き場を探してといいますが、公園デビューの代わりに市民センターの親子室デビューのような感じで皆さんいらっやっています。そういう地域なんだということで、子育て支援の事業が数多く開講計画されています。

地域を市民センターの職員が知らなくてはならないというのが一つの原点です。その知るという調査行為を、忙しいからとか面倒だからいやだという気持ちの職員は、はっきり言っていません。まず地域を知って、地域のニーズをつかまないと何もできないというのが市民センターの事業ではないかと思っています。その辺は「仙台ひと・まち交流財団」も躍起になって研修を行っている状況でございますので、だんだん館ごとの温度差もなくなっていくのかなと思っています。

相馬 加えて、採用とか研修はどうですか。

八嶋 研修は、それぞれの年度に研修委員が各区から出まして、たまたま今年度、私も研修委員なのですが、その中でどういう研修がベターなんだろうかということ相談しながら決めているのですが、私が入ったところと比べますと研修はざっと見て3倍くらいに増えているのかなと思っています。そういう面では適材適宜なされている気は致します。ちょうど2年前に「ひとまちスタイル」という研修がございまして、これは色々な意味でインパクトがあったのかなと思っています。市民センターの職員として、こういうことを考えていかななくてはならないんだよという中身で、意識改革が要求され、職員の皆さんは結構厳しかったような気がします。けれども、ある一面あの研修は有意義であったと思っています。そういう研修がどんどんなされて、スキルアップに繋がっていると思われま

相馬 会場からメモをいただいているのですが、副委員長、趣旨を説明してくれませんか。紅邑さんへの質問のところですけども、こういうふうに書いてあります。

市民活動の支援と社会教育の関係、共通点と違いはどうでしょうか。

補足して質問していただけますか。

梨本 紅邑さんの先ほどのお話の中に、地域課題の解決をめざす学びという視点から、市民活動と社会教育との関係についてのご発言がありました。ただ、例えば趣味教養に関する活動について、市民センターの講座や社会教育には含まれるわけですが、その一方で市民活動サポートセンターなどでは支援の対象外になるように思います。このあたりの活動の公益性の問題

についてどのようにお考えなのか、またそのような観点から社会教育と市民活動との関係をどう見るのか、ご説明いただければと思います。

紅邑 市民活動サポートセンターの支援対象というのが条例で定められていて、私たちは条例に則った形で施設のご利用をいただく対象を判断していて、今おっしゃっていた趣味のサークルのようなところは、条例としてはそういった団体には貸し出しますということはどうもたっていないので、市民活動を市民がやっている活動だというふうに解釈されている方がいらっしゃるんですけど、あくまでも市民公益活動ということで、限られた閉じられた方だけの趣味のサークルというようなものよりもっと開かれた場合であればご活用いただけます、というのがサポートセンターのスタンスです。ですから、例えば、お花をみんなで生けるのを楽しんで学びましょうというのはサークルだとして、その方たちが例えば老人ホームに行ってお花を生けるということを考えるための会議をしたいんだという場合は、お使いいただけるということなので、ほかの施設は電子予約制度という形でご利用いただいているんですけど、サポートセンターはいちいちヒヤリングをして貸せるか貸せないかという判断をするというひと手間かけている施設です。それは今お話ししたような条件が同じ団体でもいい場合とだめな場合があったりということですよ。

これはいわゆる施設のルールなんですけど、私が言っていたことはまたちょっと意味合いが違うと思っていて、市民公益活動というふうにとらえれば趣味としてのサークルは違っていくと思うんですが、そういった中で例えば、アメリカなどではNPO、市民活動というのはどういう組織なんだということを一言で言ったらどうなるのと聞いたときに、大人になる学校であるとか市民をつくる学校だ、というような答えが返ってきたことがあるんですけども、市民活動しながら社会のことについていろいろな気づきがあったり市民として果たすべき役割ということについて学んでいくだとかそういったことがあると思うんです。例えば、すごく基本的なことかもしれませんが、お話し合いをしてその話の進め方、会議の進め方一つということについても、学ぶ機会というのはほとんどなかったと思うんです。先ほどのパネットさんで議事録をつくるようになりましたという話ですけど、大変それは重要なことでして参加した人がわかっているけれど参加しなかった人にどういう経緯でそのことが決まっていたのかというのは記録されていればわかることですよ、記録が回されればわかるし、逆に記録がないと後でそのことについてまた話し合いの確認をしたときに混ぜ返されるというこ

とが起きるといことを招くわけです。そういったこともそういう活動をしながらだんだん学んでいくということがあり、その学びの前に学んだことを情報提供していけば活動する前にそういうルールを持って運営していくともっと活動しやすいんだということがわかるとしたら、これは市民活動で学んだことが町内会でも使えるかもしれない。もっと言えば会社で学んだことをそこに使えるかもしれないという双方の学びの機会ということが市民活動の現場でいっぱい起きてくると思っているので、私としてはこれから市民活動構想というか市民活動だって社会の一つだよということを伝えていくということが、もっと私たちの組織も含めてやっていかななくてはいけないと感じています。

相馬 ありがとうございます。

残り時間も少なくなってまいりましたので、そろそろまとめというよりはそれぞれ皆さんのこれまでディスカッションした部分でまだまだ言い足りない部分たくさんあると思います。そのことと、いろいろな形の団体が行政との距離感だとか、あるいは行政のバックアップをどういうふうに考えていったらいいのかが。その点も含めて最後にお話しをいただければと思います。

熱海さんからお願いいたします。

熱海 私どもは、ほかの地域にもあります「おやじの会」でありますとか、そういう近隣のところから情報交換をして何か大きな、もっと楽しいことができたらいいなという話は出ております。

それから、行政の方々ということであれば、若林区中央市民センターを私たちの拠点にさせていただいているのですが、本当に一生懸命先生方にやっていただいております、特にこれ以上望むことはないぐらい交流が持っておりますので、まず私どもの団体の問題点をもう少し掘り起こしてもっと高いところに、もっと子どもたちを喜ばせるために学校のPTAでありますとかそういった方たちとも交流しながら、地域に防犯の団体があるのですが、そういったところとも力を合わせながらやっていけたらいいなと思っております。

相馬 ありがとうございます。

それでは後藤さん、お願いします。

後藤 NPO団体をはじめ、市民団体で一番の問題点は事務所がない、受付の場所がないというか俗に言う拠点ですね、この市民団体の中で一番必要な拠点がなかなか持てない。個人の代表の家を申請のときは事務所にしておりますけれども、やっぱり一番は拠点だと思います。ですから、今回仙台市が包括支援センターを41箇所やっておりますが、私は包括支援センター

よりはむしろ各町の商店街に空き店舗がいっぱいありますので、そういうところにNPO団体を統一して、あるいは市民団体を統一してボランティアの窓口、社会教育などいろいろな形の受付と、人員、事務所のまとまった形を統一したものがあればかなりいろいろな面で大きな前進になるんじゃないかと思っております。ですから、私たちは特に、行政の方をお願いするわけなのでしょうけれども、拠点がほしいというのが一番でございます。

それから、行政に対しましては今言ったとおり、たとえ小さい市民団体でも少しの助成金、情報を提供していただければなと思っております。

相馬 それでは八嶋さん、お願いします。

八嶋 行政とのかかわりということでお話し申し上げますと、私たち市民センターは「仙台ひと・まち交流財団」のもとでやっているわけでございますけれども、実際市民の方から見ると、私たちは行政の一部という形で見られていると思っています。そういう観点からしますと、2年前に全国の公民館職員研修時の最後の基調講演で、福岡県の須恵町の中嶋町長の言葉が心に残っています。それは、公民館という活動そのものが、行政の中の地域のニーズを把握するための最先端の施設で、町では公民館の職員はエリートを当てている。公民館活動をしっかりしない行政はだめだという持論で、その町の職員は公民館に行くことが目標になっているというふうな町なそうです。その中での結論は、先ほども紅邑さんにも紹介していただきましたが「市民センターは来館するしないに関わらず、地域の人たちの心の拠り所であればならない。」そこに行けば職員とお話ができる、サロンのような雰囲気でも職員ともお話ができる。そんな市民センターを目指しながら、地域づくりのための事業を展開していくというのが一つの目標でございます。

相馬 ありがとうございます。

では紅邑さん、お願いします。

紅邑 今日のテーマで「地域のために社会教育ができること」というサブタイトルがあるんですけど、その社会教育というところを私がかかわっているNPOに置き換えてみれば、NPOは地域のために何ができるのかということではないかと思うんですね。まさにNPOがテーマとしていることは地域課題だったりするので、それがもっといろいろな市民の方たちに理解されるということだとすると、私たちの組織としてはそういったNPOのことについてもっと市民の人たちに知ってもらおう機会をいかに作り出していくのかということで、そのところの一つの拠点として市民活動サポートセンターというものがあっても、それはまだ一つを中心にある施設でしか

いので、そういった意味ではこれから市民センターとそういったことを共有する、もしくは連携するということがもっと必要じゃないかと思っています。

それから、NPOはもっとそういう意味では自分たちが活動していることについてのサービスをいろいろな方たちに知ってもらうということと、参加していただく機会をつくり出していくということが必要だと思っています。

私たちの組織としてということ言えば、もっと市民活動支援のノウハウというものを生かした形でコミュニティの組織とかそういったものの運営のサポートのようなことをしていくということがこれからの課題かと思っています、それは行政や企業だとかそういったところと一緒に共同で取り組んでいくということだと思います。そういった流れから言うと、先ほどから言っている公共施設の役割というのは、今八嶋さんがおっしゃっていたように、かなり重要な意味合いを持ってくると思うので、場の提供というだけではなくて人と人をつなぐとか人と組織をつなぐとかそういった地域ニーズにあったコーディネーター役というようなことが求められていくのではないかとと思っています。

相馬 長時間にわたって4人の皆さんありがとうございました。

特にまとめるというふうな意味は全くないんですけども、つい先日NHKのニュースでこんなニュースが実はございました。

東北産業活性化センターが専門家を交えた委員会が開かれて、その中の認識の部分で言うとニュータウンがつけられて人口が増加した時代からだんだん人口減少に移っている時代でありますよね。ニュータウン一つを取ってみても、開発から数十年たって世代交代がなかなかうまくいかないで地域を維持するような機能もどんどん落ちてしまっている。そういう指摘がございました。

その問題点と今後どういうふうにしようかということを考える委員会だったんですけども、時代の背景としてはプラス少子化の問題も意識の中に持っておいた方がいいかなと思います。

平成12年の特殊出生率、一人の女性が一生に産む人数でいうと1.26だったんですね。それが平成17年では1.11ということで、この何年かだけ比較しても0.15ポイント下がっているという状況です。最近の新しいデータではほんの少し回復をしてくれていますが、こういう社会の動態をどういうふうに考えていったらいいのかということも当然あるわけです。そういう時代の中で、今日のテーマのまさにコミュニティ、社会教育が一体何ができるのかという

あたりのことを、それぞれのいろいろな立場の人たちがいらっしやるとは思いますけれども、自分のこととして、このコミュニティの問題を考えていって何ができるのかというあたりを考えていただければ、もっと深い形の議論ができるのかなと思いました。

時間の制約もありますので、このへんで議論はおしまいいということにいたします。

今日は、あまり固い話ということはないんですけども最後までおつきあいいただきまして本当にありがとうございました。

では最後に、社会教育委員の会議の副委員長がごあいさつをいたします。

梨本 本日はいろいろと貴重なお話をうかがいましたので、一委員の立場からの感想を簡単におはなしさせていただきます。

まず、今回のテーマの意味ですけれども、社会教育や生涯学習といったものに対する世間の目が厳しいものだなと感じております。実際、例えば市民センターの事業費もここ何年かで大幅にカットされていますし、趣味教養みたいなものはカルチャーセンターでもやっているのではないかと、同じようなものをなぜ公の施設でやるのかという見方があると聞いています。ただ、今日のお話でうかがった八嶋さんのところの取り組みもそうですし、パパネットの活動でも市民センターの力を有効に生かしながら進められているとか、実際には市民センターや社会教育が地域のために活動しているということは、これまでもあったと思っております。もちろん、何も問題がないのかということ決してそうではなくて、解決すべき点や改善していく課題がたくさんあるでしょう。ただ、今までとはまったく違う新しいことを社会教育がやらなくてはいけないというよりは、むしろ今までやってきたことをさらに充実させていくということが必要と考えております。

確かに、町内会活動をしていらっしやる方に対する支援が不十分とか、NPOの活動も本当はもっと社会教育として支援をしてもよかったという考え方があることも承知していますので、そのあたりに改善の余地があるように思います。ただ、これまでの社会教育はどちらかという、地域で積極的に活動していらっしやる方に対する支援よりも、地域との関わりが十分ではない方たちが社会と関わる第一歩を踏み出すという役割を果たしてきたと思っております。

私も社会教育委員の会議では、この間いろいろな方々にお話をうかがったり調査をしてまいりました。その中で、市民センターの講座を受けた方たちがその後も活動を継続し、10年ほどたってNPO法人を設立されたというお話をうかがいました。地域での活動

が10年という長い時間をかけて展開する中で、最初のきっかけが市民センターあるいは社会教育だったということです。地域になじみがない人たちに関わりのきっかけを提供する、いわば地域との関わりのセーフティネットとして、社会教育があるのだと思います。これまで、学びの成果を地域として活用する仕組みが十分でなかった背景には、同じ地域の活動どうしがお互いに連絡を取り合うことがなく、バラバラに展開されていたという点があるように思います。また、学んだ成果を行政のほうできちんと把握して、それを生かして政策設計や事業の展開をしていただかなくてはならないと思っております。

このような課題を押さえながら、社会教育がどうあるべきなのかを議論し、それを行政に対して、あるいは市民の皆様に対しても提案・問題提起をしていくのが、我々社会教育委員の役割と思っております。本来なら今日のような機会は、せっかく来ていただいた皆様からのご提案やご意見をもっと出していただければ良かったと思います。アンケートをお書きになっていただくなど、皆様のお声をお聞かせください。

相馬 ありがとうございます。

アンケートをお書きいただいたと思いますので、係の者がまいりますのでどうぞお渡しをいただければと思います。

特に発言を、という方いらっしゃいますか。

はい、どうぞ。

発言者 つまらないお伺いなんですけれども、後藤さんにお伺いしたいのですが、先ほど草取りの話がありまして1時間1,200円ということですが、3、4人で行くと1時間3,600円になるわけですか。

後藤 そうですね。あくまで1人の話ですから。結構高いと思いますが、皆さんちゃんと納得して、もちろん行く前に必ず責任者が行って値段を確認してから行くということで、皆さんちゃんと出していただいております。

発言者 ありがとうございます。

相馬 そのほかございますか。よろしいでしょうか。どうぞ。

発言者 勉強不足で申しわけございません。私も市民センターにはよく顔を出して講座というようなものも時々依頼されるんですけれども、中央市民センターとそうでない一般の市民センター、管理運営が再編期に入っていますね。それで、組織運営の話はよく聞かれますけれども、私どもが学んだ生涯教育から始めて、生涯学習の理念というのがあるわけですね。中央でもいろいろな審議会から出てきましたが、運営論はそれは大事です。改革、変化、お金の問題。しかしまず運営のほかにあるべき市民をどういう方向

に、社会教育であれ、生涯教育であれ、行政であれ、NPOであれ、5年でも7年でも10年でもいいのですが、戦略をしっかり立ててでこぼこあっていいと思います。地域差、格差いろいろあるわけですから。しかし、そこに一致してリーダー、指導部、スタッフが目指す方向、理念、そういうものが私まだ勉強不足でよく見えないのです。ランニングしながらそういうものをつくっていく時代だと思いますけれど、そのところ。管理運営は一つの組織ですから、目指すもの。生涯学習もいるんですね。ですから今、例えば県庁の生涯学習課に行っても、いろいろな講座を毎年やられて私も受けましたが、受けた受講生の名簿を貸してくださいと、連携を取りたいんだと。区の居住の方。それはもう情報管理の時代でできませんと堂々とおっしゃるわけですね。わかるのですが、せっかくそういう点に結んで線に結んでやりたいという人がいても、そこをネットづくりに向けて性根を据えてやろうとする、そういうところがよくないなと。ちょっとわがままな意見ですけども感じていることを申し上げさせていただきます。

相馬 教育長でも来てお答えすればいいんでしょうけれども、会場におりませんので、ご意見として伺っておきたいと思っております。ありがとうございます。それではそろそろ時間も近づきましたので、このへんで終わりたいと思っております。

社会教育委員、紅邑さんと私、それから前に座っていたメンバーが社会教育委員ですけれども、いろいろな形でディスカッションしながらあるべき社会教育の方向というものをいろいろな形でアピールをし、オープンにしていまいますので、市のホームページなどにも載っておりますので、目を通していただければどういう議論の経過があって何をお話したのかというのが見えてまいりますので、ご参考までにお話をいたしました。

本日はどうも長時間ありがとうございました。これで終わりたいと思っております。(拍手)